

令和3年度 福岡県立大学 公開講座Ⅱ
報告書

実施日 令和4年2月18日(金) 17:00~18:30

開催方法: オンライン配信

テーマ『紙芝居を通じて見る筑豊の歴史 王塚跣原作、服部団次郎改作『筑豊一代』

講演 「筑豊の歴史と体験を語る意味を考える」 講師 細井勇(福岡県立大学特任教授)

紙芝居『筑豊一代』

上演 大西広幸(川崎町在住の紙芝居師)

1. 本講座の概要報告(細井勇[福岡県立大学特任教授])

本公開講座では、前半で細井勇(福岡県立大学特任教授)は「筑豊の歴史と体験を語る意味を考える」というテーマで、とくに「筑豊の子供を守る会」の活動に参加した学生達が経験したことを振り返り、その意味を考えようとしてきました。後半で川崎町の紙芝居師である大西広幸氏は、紙芝居『筑豊一代』を上演しました、以下は、その報告書です。

今回の公開講座を開催することになったきっかけ

今回の公開講座を開催することになってきっかけを説明することにしたいと思います。私は日本キリスト教社会福祉学会に所属し、20年以上編集委員をしているのですが、同じ学会員として静岡の児童養護施設の職員であった黒沼宏一さんとよく話をしてきました。黒沼さんは、『筑豊石炭産業史年表』の著者の一人であり、筑豊については抜群に詳しい方です。また、筑豊の中小炭鉱の閉山が集中した1959年に黒い羽根運動が起こり、そのことを契機に1960年、ミッション系大学の学生たちによって「筑豊の子供を守る会」が起こるのですが、1964年度の第4代委員長になったのが黒沼さんです。ある時、黒沼さんは、私に「守る会」の関係資料をすべて私に寄贈したいと言われ、大学に寄贈してもらうことにしました。それが現在、本学図書館本館の1階に開設されている地域文化資料室に保管されています。そこで、私は本年度「守る会」の関係資料集成を発刊することを決意しました。本公開講座では、附属研究所の企画であり、「守る会」関係資料集成の出版計画のことを含め、「守る会」について報告することになりました。

「筑豊の子供を守る会」をどういう視点から説明するのか

そこで、大きな問題は「守る会」についてどう説明するか、どのように意味づけるか、という問題でした。この点ずいぶん悩んだのです。私は従来、「守る会」を1960年代のキリスト教学生運動として捉え、その発足から解散に至る経緯は、1930年代の基督者学生運動

(SCM) の再現であった、と捉えてきました。しかしながら、当事者たちの意見では、私のこうした解釈には違和感がある、ということでした。当時の学生達の中で SCM のことを知っていた人はほとんどいません。そこで、今回は「遊びの空間の創造」という意味に注目することにしました。これは私としては劇的な変化です。そこで、この劇的な変化はどこからくるのかを少し説明させていただきたいと思います。

2018 年に、日本ソーシャルペダゴジー学会が発足するのですが、発足時から私は理事になっています。英米から発祥したソーシャルワークが問題に焦点を当て、問題解決志向であるとするなら、ドイツから発祥し、ヨーロッパ大陸諸国で普及しているソーシャルペダゴジーは、子どもを「豊かな存在」として捉え成長志向です。エデュケーション（教育）が教科指導という意味であるのに対し、ペダゴジー（教育）にはケアという意味が含まれています。ソーシャルペダゴジーとは、社会を場とするより広い意味の教育、ということです。それは、社会の成長と個人の成長の相補性を強調します。

ところで、2022 年 1 月の本学会の第 7 回学術集会では、「遊びの空間の創造」がテーマでした。東日本大震災の際に活動した児童精神科医の体験が語られました。大津波による地域ぐるみの突然の喪失体験において、子ども達は言語化することが困難であるが故により深刻な影響を受けてしまう。そのとき、必要とされているのは、問題を個別化されたトラウマとして捉え、心理カウンセラーによる治療的な介入を行うことではなく、むしろ遊びの空間の創造であり、仲間づくりであった、という報告でした。ソーシャルペダゴジーには、子どもを単に環境の犠牲者として捉えるべきではなく、逆境の中でも育っていける「豊かな存在」であること、そうした子供の潜在的な力が発揮されるためには、環境の制約を受けない落ち着いた大人ないし親によって守られた空間である、と同時に子どもにとって自由度のある「遊びの空間」が重要である、という考え方があります。

この児童精神科医のお話を、私は炭鉱の劇的閉山の集中、炭住での生活破壊、そこに置かれた子ども達の深刻な状況への対応として、子どもと友達になるという理念を掲げ、子ども会活動を担った「守る会」の活動を思い起こしながら聞いていました。「守る会」の活動記録を読んでいて気付くことは、学生たちは問題志向であり、問題解決志向であった、ということです。そして、問題は、利益本位の日本社会の構造的な問題にあるとして、子ども会活動では問題解決にはならない、と考えていくようになったのです。1960 年代後半は学生運動の、とくに全共闘の時代になっていきます。当時の時代性もあって、キリスト教主義による奉仕活動には限界があるという認識に至って「守る会」は解散していったのです。

天災としての東日本大震災による喪失体験と人災というべき筑豊の炭鉱閉山期の喪失体験を同一視するのは適当ではない、という思い、ひっかかりは今も残っています。しかし、当時、「守る会」の活動は、子どもとの関係性に焦点を当てるものであったのであり、「遊びの空間の創造」にかかわる実践でした。また、学生達は子ども達に作文を書くことを勧め、大学に戻った後も分級（学年別の学習指導）で知り合った子ども達との手紙のやり取りを継続していきました。「遊びの空間」の中で、学生達は、子どもが深刻な問題を抱えているよ

うにはとても思えない子どもらしさを感じ取っています。そこで生起していることは、「子どものために何をするか、ではなく、子どもと共に何をするか」であったと思います。そこでは問題志向でなく成長志向になっているのだと思います。しかし、学生達はしばしば「子どものために何かをするか」というプログラム志向に陥り、プログラムの消化に追われ疲れてしまった、ということも少なくなかったようです。また、作文や手紙は、関係性の継続であり、感情の言語化を通じた自己統制能力の獲得という意味をもつでしょう。私は近年ソーシャルペダゴジーを学ぶことになり、「守る会」の活動は関係性に焦点を当てる、まさにソーシャルペダゴジーの実践であったと意味づけることが可能ではないか、と思うようになったのです。学生達は、そのとき、自らの活動の意味を言語化できていなかった、その活動を意味づける理論や概念を持たなかった、と改めて考えたしだいです。以上の経緯から、私は「遊びの空間の創造」という視点から「守る会」の活動を意味づけ直す、という認識方法で説明することにしました。

大西広幸さんによる紙芝居「筑豊一代」を上演することになった経緯

公開講座のテーマは「紙芝居を通じて見る筑豊の歴史」です。紙芝居をすることになった経緯を説明したいと思います。私が川崎町の紙芝居師である大西広幸にお会いしたのはつい最近のことです。福岡市の牧村元太郎牧師宅で会ったのです。服部団次郎は、貝島炭鉱の炭坑夫となり、炭坑夫伝道を目指して1948年に「大之浦教会」（その後宮田教会となる）を設立し、1970年には「炭鉱犠牲者復権の塔」の建設運動に着手します。このとき服部は王塚跣の小説『筑豊一代』に注目し、それを紙芝居にすることを思い立ちます。そしてその絵を山本作兵衛に頼むのです。服部は完成した紙芝居をもって労働組合などをまわって、「復権の塔」が目指す意図を説明し、資金集めをしていったのです。これに協力したのが服部団次郎の息子清志さんと大西さんでした。牧村牧師は、宮田教会で長く牧師をされ、服部団次郎の資料を保管されてきたのでした。私は、服部団次郎の関係資料を資料集成に盛り込むべく牧村牧師宅（福岡市社家町教会）を訪問し、そこで大西さんと初めてお会いすることになったのです。

「守る会」の第6代委員長桜井秀教さんは1967年に「守る会」の解散宣言を行いました。桜井さんは東京神学大学の院生で、1969年に全共闘を起し議長になった方です。大西さんは桜井さんの後輩ということになります。大西さんは1970年に川崎町の「守る会」の活動に参加し、その後川崎町に定住することになり、紙芝居をして40年になります。「守る会」の全国組織の解散は1967年ですが、関西学院大学のチームなどが川崎町での活動をまだ継続していました。

こうした経緯から、今回の公開講座では、大西広幸さんに「筑豊一代」の紙芝居をしていただくことになりました。大西さんは、冒頭で、王塚跣という川崎町出身の小説家について説明し、紙芝居を終えて、山本作兵衛が作ったとされる歌を唄ってくれました。紙芝居では、大西さんならではの抑揚のある語り引き込まれて人が多かったと思います。

炭坑犠牲者『復権の塔』建設趣意書

大西さんは、最後に、服部団次郎による炭坑犠牲者『復権の塔』建設趣意書を朗読されました。この言葉をもって、「紙芝居を通じて見る筑豊の歴史」を締めくくったのです。

「過去百年間、実に多くの炭坑労働者達が下罪人あつかいを受けて、その人権をうばわれ、牛馬のように酷使されてたおれてゆきました。

このように非人間化された石炭産業の伝統は、この筑豊の自然を破壊したばかりでなく、人々の心の中にも痛ましい創痕をのこして、今でも差別と被差別が幾重にもゆがめられた層をなして、そこから来る人間関係の不幸と荒廃が重大問題となってきております。このような状態のなかにあって私達はいまこの筑豊において人権とは何なのかということその原点にかえって、改めて考えなおしてみる時期に来ているのではないのでしょうか。

石炭産業が日本の近代産業を生み出し、これを育てた原動力であるとしますならば、この筑豊はこの近代産業のゆかりの地であり、あの非人間化された労働者達は戦争の犠牲者達よりも貴い犠牲者として高められなければなりません。筑豊における真の人権の確認は、ここからはじめるのではないのでしょうか。

このような視点にたって、私達はかつての炭坑労働者有志の者達の発起によって、「炭坑犠牲者『復権』の塔」を建設することを決意しました。」

公開講座に参加された教会関係者に感謝して

今回の公開講座開催に至る道のりは容易ではありませんでした。私は企画段階で、本公開講座をどこに案内するかという打ち合わせで高校生に紙芝居を見てもらいたいと述べ、田川市郡の全ての高校に案内チラシを配ることにしたのですが、結果として高校生の参加はありませんでした。参加申し込みがほとんどない状況で、直前になって大西さんに事情を説明したところ、大西さんは教会関係者などに働きかけてくださいました。「守る会」とはキリスト教学生運動であり、その活動への参加を通じて牧師になった方は何人もいます。その意味では、最初から教会関係者に本公開講座は案内するのがよかったかと今さらながら思っているしだいです。

そこで最後に、本公開講座にご参加いただいたキリスト教関係者について触れたいと思います。犬養光博さんが参加して下さいました。私は大変緊張しました。犬養さんは、1961年に2年目の「守る会」の夏季キャラバン活動に参加され、1965年から福吉炭住で居住され福吉伝道所を開設された方です。元宮田教会牧師である牧村元太郎さんとその前任牧師である平島禎子（児島教会）さん、児島教会の笹井健匡さんが参加してくれました。本格的な感想文を書ってくれたのは山城順さんです。長崎ウエスレアン大学の元教授ですが、飯塚教会の牧師をされた方であり、学生のときは関西学院大学チームとして「守る会」の活動に参加された方です。飯塚教会の現牧師志村真さんも参加して下さいました。教文館の渡辺満さん、ICU(国際基督教大学)チームとして「守る会」の活動に参加された丸木郁子（旧姓

のまま)さんも参加してくれました。今回の公開講座の開催を通じて、新たな人間関係の広がりを実感しているところです。

今回、このような機会をいただいたことに感謝申し上げ、関係者のご協力とご支援に感謝申し上げます、本公開講座の報告とさせていただきます。

2. 参加者状況

今回の公開講座では、田川近隣地域及び国内から、教育機関・福祉機関・企業等にお勤めの方や、学生・地域一般の方など61名の方にご参加いただきました。

アンケート結果（回答者数 16）

今回の公開講座を知ったきっかけ（複数回答）

知人の紹介	11	69%
職場での案内	4	25%
チラシ	2	13%
大学のホームページ	1	6%
新聞	1	6%

受講講座の印象

大変満足	6	38%
おおむね満足	9	56%
普通	1	6%

今後に本学の公開講座への参加したいか

はい	12	75%
わからない	4	25%

◆いただいたご意見や感想のいくつかを紹介いたします。

- ・ 紙芝居のおかげで本を読むよりも筑豊の歴史、そこで生きた人の思いや暮らしをより理解することができたように思います。炭鉱労働者と農夫との関係、労働条件の変遷や大手と中小炭坑との違いもよくわかりました。「炭鉱犠牲者復権の塔」についても知ることができとても勉強になりました。
- ・ 大西さんの紙芝居を初めて拝見しました。直接に拝見したらもっと迫力が感じられたことと想像いたしますが、それでも、独特な節回しや声色が感じられてお話に引き込まれました。
- ・ 初めて筑豊炭鉱を題材とする紙芝居を聞きました。あの時代についての理解が深められたと思います。
- ・ 紙芝居『筑豊一代』の実演を初めて見ました。熱演に感動しました。
- ・ 地域に残る文化を具体的に学べてよかったです。また、直接見てみたいです。
- ・ 知らないことが多く大いに参考になった、また、紙芝居が非常に良かった、音声、照明の配置に更に工夫が必要か。

◆今後に向けてのご要望(テーマや内容など)のいくつかを紹介いたします。

- ・ 田川・筑豊に関わる歴史、文化、現状分析、将来予想
- ・ 筑豊の石炭産業に限らず、北九州地域の産業基盤変革への地域の取組みなど
- ・ 川筋かたぎを扱った文学や演劇、映画の歴史を知りたいと思います。
- ・ 炭坑節など興味があります。

ご参加いただきましたみなさま、どうもありがとうございました。

(福岡県立大学附属研究所公開講座Ⅱ担当者一同)

※ 本公開講座は、田川市・福岡県立大学包括連携協定に基づき、田川市から一部助成を受け実施しました。